

『文鏡秘府論』天卷「調四聲譜」所載の韻紐圖について

平田眞一朗

はじめに

空海（774～835）撰『文鏡秘府論』（以下『秘府論』と略す）天卷には、冒頭の總序に次いで「調四聲譜」と題された一篇の論文が収録されている。そこでは始めに「諸家調四聲譜、具列如左。」と述べた後、漢字を様々に配列した幾つかの圖を交えながら、四聲相配、雙聲、疊韻、反切などの原理について論じている。この「調四聲譜」の前半部分（小西 1953：20-23 の[四][五][六]の條、もしくは興膳 1986：18-22）については、これと基本的に同じ文が安然（841～903?）撰『悉曇藏』卷二「悉曇韻紐」に「四聲譜云」として引用されていることから（大正藏・卷 84：381c-382a）、もともとは『四聲譜』なる書物からの引用であったと考えられている¹⁾。この『四聲譜』については、どのような内容の書物であったのか、またその著者は誰であったのかなど詳しいことは分かっていない。ただ沈約（441～513）に『四聲譜』なる著作があったことが知られており²⁾、『秘府論』が引用する『四聲譜』についても、沈約の著作だった可能性があると考えられている³⁾。

さてこの「調四聲譜」のうち、『四聲譜』からの引用と認められる部分に次のような記述がある。小西 1953：22 の[六]の條、もしくは興膳 1986：21-22 を参照。

四聲紐字，配爲雙聲疊韻如後。

郎朗浪落	黎禮麗振
剛啞鋼各	筭併計結
羊養恙藥	夷以異逸
鄉嚮向諶	奚筊啞緜
良兩亮略	離邏詈栗

張長悵著 知伽智室

凡四聲、豎讀爲紐、橫讀爲韻。亦當行下四字配上四字、卽爲雙聲。若解此法、卽解反音法。反音法有二種、一紐聲反音、二雙聲反音、一切反音有此法也。

上に引いた記述に「四聲紐字，配爲雙聲疊韻如後。」として四十八個の漢字を配列した圖が掲げられているが、本稿ではこの圖のことを「韻紐圖」と呼ぶ⁴⁾。『秘府論』では、相配する平・上・去・入聲の韻にそれぞれ屬し、しかも聲母を同じくする四つの字をひとまとまりとして「紐」と稱する。この韻紐圖はそのような四字一組の紐を、十二個並べて作成されたものである。

本稿の末尾には「參考資料」として、韻紐圖を始め、本稿の論旨に關係する三つの圖をまとめて掲げてある。そこでは圖に用いられている漢字に全て、括弧に括って所屬する『廣韻』の韻目を記してある。開口の韻と合口の韻との對立が存在する韻目では、當該漢字が合口の韻に屬する場合にのみ韻目の右に特に「合」と記した。それぞれの紐の下には四角で圍って所屬する中古音の聲母を記してある。同じ段に横に並べられている漢字は全て中古音の聲調が等しい。卽ち ABCD と EFGH はそれぞれ平・上・去・入聲を表している。

「資料 I：韻紐圖」には『廣韻』の韻目を記していない漢字が四つある。このうち② B「啊」、② F「併」、⑥ F「伽」の三字は『廣韻』に収録されておらず、字體から考えて、これら三字それぞれに相配する平聲の欄に置かれている漢字の字體に、口偏や人偏を加えるなどして作り出したものであろう。② F に該當する小韻（齊韻上聲開口見母）は『廣韻』には存在せず、『韻鏡』でも該當する欄は空欄になっている。また⑥ F に該當する小韻（支韻上聲開口知母）は『廣韻』には存在するものの（掇 陟侈切）、切韻殘卷（「切三」）には存在しておらず、上田 1975 はこの小韻を後加小韻と見なしている。④ G「啞」は『廣韻』では青韻去聲開口見母（古定切）であり、圖の構成から考えて、このような字がここに用いられるはずはない。おそらく② B、② F、⑥ F の場合と同様に、ここには本來④ E「奚」の字に口偏を加えた「啞」の字が置かれていたものではないだろうか。この字と「啞」とは字體が紛れ易いため、傳寫の過程で誤って傳えられた可能性が考えられると思う。

「調四聲譜」のうち、上に引用した韻紐圖を含むくだりは『悉曇藏』卷二に

も引用されている。『悉曇藏』が引用する韻紐圖と『秘府論』が引用する韻紐圖との間には若干の文字の異同がある。それらについては「資料Ⅰ：韻紐圖」の所に注記した通りである。ただこのうち⑥Cについて、『廣韻』で調べると『秘府論』の「悵」が陽韻去聲開口徹母（丑亮切）、『悉曇藏』の「脹」が陽韻去聲開口知母（知亮切）なので、圖の構成から考えれば後者の方が正しい。『韻鏡』では陽韻去聲開口知母の欄に「帳」の字を置いている。「悵」と「帳」は字體が紛れ易いため、『秘府論』の⑥Cも本来は「帳」であった可能性が考えられると思う。

さて、以下本稿では韻紐圖の構造や成り立ちについて、韻紐圖制作の目的（§1）、韻紐圖における疊韻（§2）、紐聲反と雙聲反（§3）、陰聲韻・入聲韻・陽聲韻の関係（§4）という四つの論點から考察を加えていくことにする。

1. 韻紐圖制作の目的

資料Ⅰに掲げたように、韻紐圖は、紐をなす四つの漢字を十二組（縦に二組、横に六組）配列して構成したものである。そして「はじめに」で引用したように、圖の前には「四聲紐字，配爲雙聲疊韻如後」と記され、圖が掲げられた後には「凡四聲、豎讀爲紐、横讀爲韻」と記されており、同じ行に縦に並んだ二組の紐（八つの漢字）は聲母が等しい雙聲の関係にあり、同じ段に横に並んだ六つの漢字は韻母が等しい疊韻の関係にあるというのが原則である。但し後述するように、この原則は韻母に関してはあまり厳密でない。

この韻紐圖は一體どのような目的で作成されたのだろうか。韻紐圖とは構成の仕方が異なるけれども、やはり同じように幾つかの紐を雙聲や疊韻、四聲相配の原理によって配列した圖として「九弄圖」がある。資料Ⅱに掲げた圖⁵⁾がそれである。この九弄圖は圓仁（794~864）が847年にその入唐から歸國した際、日本に傳えたものであり、圖には「元和新聲韻譜」と題した序文が附されている。元和は唐の年號で806年から820年までの十五年間に当たる。九弄圖には十種類の「操法」が附されており⁶⁾、これは圖に用いられている漢字の中から幾つかを取ってきて、それらを様々な順序に並べることで、それらの漢字相互の間にある雙聲や疊韻の関係について理解させようとしたものである。例えば「正韻」という操法では、①A「張」と①E「良」のように韻母は

全く等しく、聲母のみ異なる二字を選んで一組とし、このような組み合わせは全部で十六組あるから、それら十六組三十二字を「張、良」「長、兩」という風に順々に並べていく。また「雙聲」という操法では、①A「張」を、これと聲母が等しい関係にある上段の十五字全てと、「張、長」「張、帳」という風に順々に組み合わせていく。九弄圖の操法とは、このような練習を通じて、雙聲や疊韻の原理について学習させるためのものであったと考えられ、おそらく聲に出して朗誦されたであろう。

『秘府論』の韻紐圖には九弄圖の操法のようなものは附されていないが、やはり九弄圖と同じように、圖に用いられている漢字を様々に組み合わせて、雙聲や疊韻の原理について学習させるという目的があったと考えられる。「はじめに」で引用したように、韻紐圖が掲げられた後には次のような記述が続いている。

凡四聲、豎讀爲紐、横讀爲韻。亦當行下四字配上四字、卽爲雙聲。若解此法、卽解反音法。

この記述からすると、圖で同じ段に並んでいる漢字を横に読んでいたり、上段の紐の漢字と下段の紐の漢字とを組み合わせて雙聲の對を作ったり、というような、九弄圖の操法に類する利用法が、韻紐圖にもあったものと推測される。従って韻紐圖もまた聲に出して朗誦されたであろう。そして次に述べるように、韻紐圖の構成には、そのような口唱のための工夫と見られる跡が実際に残されている。

資料 I では韻紐圖に用いられている漢字のそれぞれに『廣韻』の韻目を記してある。即ち、①と②の紐は上段が唐韻⁷⁾、下段が齊韻（入聲は屑韻）であり、Karlgren 氏の中古音推定音價を当てはめれば、上段が aŋ、下段が ei（入聲は et）となる⁸⁾。⑤と⑥の紐は上段が陽韻、下段が支韻（入聲は質韻）であり、同様に中古音推定音價を当てはめれば、上段は iɑŋ、下段は iě（入聲は iět）となる。③の紐は上段が陽韻で、下段は平聲が脂韻、上聲と去聲が之韻、入聲が質韻であり、中古音推定音價を当てはめれば、上段は iɑŋ、下段は平・上・去聲が i⁹⁾、入聲が iět となる。つまり①、②の紐では、上段に一等韻、下段に四等專屬韻を用いており、これらはいずれも拗介音（-i 類の介音）を有さない直音の韻母である。③、⑤、⑥の紐では、上段と下段にともに三等韻を用いてお

り、これらはいずれも拗介音を有する拗音の韻母である。このように、韻紐圖では（④の紐を除き）上段と下段を通して介音の直・拗が一致するよう漢字が選ばれていることが分かる。これと同様の工夫は切韻系韻書の反切にも用いられており、そこでは、反切下字が直音であれば反切上字にも直音を用い、反切下字が拗音であれば反切上字にも拗音を用いようとする強い傾向が認められる。切韻系韻書の反切にこのような工夫の跡が認められるのは、上字と下字を續けて唱える時に發音が滑らかにつながり、歸字の發音を導き出しやすくするためであったと考えられている¹⁰⁾。そこで、韻紐圖の①、②、③、⑤、⑥の紐で、上段と下段を通して介音の直・拗が一致するように漢字が選ばれているのも、これと同様に口唱を滑らかにするための工夫であったと考えられる。例えば、上段から下段へと縦に並ぶ二つの紐を續けて唱えたり、また上段と下段の漢字を組み合わせて雙聲の對を作って讀み上げたり、というような練習が行われていたものと想像される。

ところで韻紐圖の④の紐では、上段が三等陽韻、下段が四等齊韻（入聲は四等屑韻）であり、中古音推定音價を当てはめれば、上段は拗音 *ian*、下段は直音 *ei*（入聲は *et*）となり、上段と下段とで介音の直・拗が一致していない。また④の紐では上段の聲母が曉母、下段の聲母が匣母であり、上段と下段の聲母も一致していない。（④以外の紐ではいずれも上段と下段の聲母は一致している。）④の紐だけがこのように不規則であるのはなぜなのか、はっきりとした理由は分からないが、上段と下段とで介音の直・拗や聲母をそろえにくい何らかの事情があったのかもしれない。例えば、いま假に④の紐では上段の紐が先に作られて、それに合わせて下段の紐が選ばれたものと考えてみると、⑤や⑥の紐と同じように、④の下段の平・上・去聲には支韻の字を、入聲には質韻の字をそれぞれ用いるのが望ましかったはずである。ところが、支韻上聲開口曉母の小韻には適当な字が無かった可能性がある¹¹⁾。また、支韻と質韻の曉母の小韻には重紐（三等と四等）の區別があるが、重紐三等の字で紐を構成しようとするれば、上聲のほか、更に入聲がそろわなかった可能性がある¹²⁾。そして重紐四等の字で紐を構成しようとするれば、今度は上聲のほか、更に去聲がそろわなかったであろう（『廣韻』には支韻去聲開口曉母の重紐四等に当たる小韻が存在しない）。このように④の下段では、正しい紐を選びにくい事情があったのかもしれない

い。但し、該当する小韻に適当な漢字が無くても、「はじめに」で取り上げた②Fや⑥Fの例のように、その小韻の發音を表すために新たな漢字を作り出してしまおうという方法はあったはずである。

さて以上に述べてきたように、韻紐圖では、一部の例外を除いて、同じ行に縦に並んだ二組の紐（八つの漢字）は聲母ならびに介音の直・拗まで一致する。一方、同じ段に横に並んだ六つの漢字は、韻母が等しい疊韻の関係にあるというのが原則であるが、こちらはあまり厳密でない。そこで次に §2 において、韻紐圖における疊韻というのがどのような内容のものか、ということを考えることにしたい。

2. 韻紐圖における疊韻

「はじめに」で紹介したように、韻紐圖が掲げられた後には「凡四聲、豎讀爲紐、横讀爲韻」とあり、圖で同じ段に横に並べられた六つの漢字は、疊韻の関係にあると認められていたことが分かる。しかし『廣韻』で調べると、上段と下段のいずれにおいても、横に並んだ六つの漢字は全て同じ韻目に所屬しているというわけではない。上段の場合、資料 I に示したように①と②の紐は唐韻に、③から⑥までの紐は陽韻にそれぞれ屬している。『廣韻』では唐韻と陽韻は同用とされており、南北朝時代の用韻でも唐韻と陽韻の間の通用は一般的だった¹³⁾。中古音推定音價を当てはめると、唐韻は $aŋ$ 、陽韻は $iaŋ$ であり、両者の違いはほとんど介音の直・拗のみである。韻紐圖における疊韻の条件はゆるく、唐韻と陽韻の間のこのようなわずかな違いは無視されて、両者には疊韻の関係が認められたのであろう。

これに對して下段の場合は状況がやや複雑である。資料 I に示したように①、②、④の紐の平上去聲は齊韻に、⑤と⑥の紐の平上去聲は支韻に屬し、③の紐については平聲が脂韻、上聲と去聲が之韻に屬していて、異なる韻目に所屬する字が混在する様相を呈している。下段の紐の入聲は①、②、④が屑韻（先韻入聲）、③、⑤、⑥が質韻（眞韻入聲）にそれぞれ屬している。下段で、このように様々な異なる韻目に所屬する漢字同士が、疊韻と認められていることについては、注意深く吟味する必要があると思われる。

小西 1948 : 143-147 は、蟹攝に屬する齊韻と止攝に屬する支・脂・之韻とが

疊韻と認められているのは、沈約らが活躍した南北朝時代中期以降の詩文の用韻と矛盾する¹⁴⁾と指摘した。同様のことは入聲で、山攝の屑韻（先韻入聲）と臻攝の質韻（眞韻入聲）とが疊韻と認められていることについても指摘できるだろう。『廣韻』では支・脂・之の三つの韻は同用とされているが、齊韻は去聲霽韻が同じ蟹攝の祭韻と同用とされているほかは、平聲と上聲については獨用である。また屑韻と質韻との間の通用も認められていない。

しかし詩文の用韻ということから離れて、直接に中古音の體系とその推定音價によって観察するならば、これらの疊韻の配置にはそれなりの根拠があったらしいということが分かる。§1で述べたように、韻紐圖では上段と下段を通して介音の直・拗が一致するのを原則とする。今、この例外となる④の紐を除いて考えれば、この原則に基づいて、下段の①と②には直音の紐を、下段の③、⑤、⑥には拗音の紐をそれぞれ用いなければならないはずである。そして③、⑤、⑥の紐には三等韻の支・脂・之韻が用いられているのだが、これらが所屬する止攝には三等韻しかないので、①と②に配すべき直音の紐は止攝の韻によって構成することができない。また①、②の紐には四等專屬韻の齊韻が用いられているが、齊韻が所屬する蟹攝には、祭韻と廢韻という二つの三等韻しかなく、これらの韻にはいずれも去聲しかないので、③、⑤、⑥に配すべき拗音の紐は蟹攝の韻によって構成することができない。ところで止攝の韻と蟹攝の韻はいずれも*i*類の韻尾を持つ點で共通している。そこで止攝の韻で拗音の紐を作り、また蟹攝の韻で直音の紐をつくって、兩者を組み合わせる韻紐圖の下段を構成したのだらうと考えられる。

また、下段の入聲は①、②、④に山攝の屑韻（先韻入聲）が、③、⑤、⑥に臻攝の質韻（眞韻入聲）がそれぞれ用いられている。質韻には『廣韻』で同用とされる直音の韻は無いけれども、屑韻は『廣韻』で拗音の薛韻（仙韻入聲）と同用とされている。③、⑤、⑥に薛韻を用いなかっただのはなぜだろうか。これについてはおそらく、薛韻 *jet* よりも質韻 *jët* の方が、音價の上で③、⑤、⑥の平上去聲に用いられている支・脂・之韻の音價 *ië* あるいは *i* に近いと考えられたためであろうと推測される。①、②、④に用いられた屑韻の音價 *et* は、相配する平上去聲に用いられている齊韻の音價 *ei* と主母音が一致する。

さて前に紹介したように、小西 1948 は韻紐圖で、蟹攝の韻と止攝の韻との

間に疊韻の關係が認められていることは、沈約當時の詩文の用韻と矛盾すると指摘していた。この矛盾については、上に述べてきたように、ある程度合理的な説明を與えることが可能である。しかし小西氏は指摘しなかったが、下段の紐にはもう一つ、沈約當時の詩文の用韻とは矛盾する點がある。それは支・脂・之の三つの韻の間に疊韻の關係が認められている點である。『廣韻』ではこの三つの韻は同用とされているが、『廣韻』の同用の規定は宋代初期に定められたものである。南北朝時代から初唐にかけての詩人たちの實際の用韻では、脂韻と之韻の間で通用することはしばしばあっても、支韻は獨用であり、支韻が脂・之韻と通用することはほとんど無かった¹⁵⁾。勿論上に述べたように、韻紐圖における疊韻が詩人たちの用韻と一致していなければならないということはない。しかし用韻には當時の音價の類似や相違がある程度反映されているはずである。韻紐圖の作成者に、當時の用韻との間に矛盾を生じてまで、下段の紐にわざわざ支・脂・之の三つの韻を交えて用いなければならない必要性があったとは、考えにくい。

そこで本稿では、一つの假説を立ててこの問題について考えてみたい。③のEFGには本來、⑤と⑥のEFGと同じように支韻が用いられていたのではないか。もしそうであれば支・脂・之の三つの韻にまたがる疊韻は取り消される。そもそも平聲に脂韻、上聲と去聲に之韻を用いて構成されたこの③の紐はいささか不自然である。資料Iの注に示したように、『悉曇藏』卷二に引用されている韻紐圖では、③のEFGに「頤」「飴」「易」の三字が置かれている。『廣韻』で調べると、この三字の音韻地位は次の通りである。圖における位置と聲母もしくは聲調が合わない反切にはその右肩に*印をつけた。

「頤」與之切：之韻平聲以母

「飴（馳）¹⁶⁾」以鼓切*：支韻去聲開口以母

羊至切*：脂韻去聲開口以母

神至切*：脂韻去聲開口船母

「易」以鼓切：支韻去聲開口以母

羊益切*：清韻入聲開口以母

ところで『韻鏡』第四轉で支韻開口以母の平上去聲の欄を調べると、それぞれ「移」「飴」「易」の三字が置かれている。思うに『悉曇藏』の韻紐圖で③F

に置かれている「𪗇」の字は、本来『韻鏡』第四轉で支韻上聲開口以母の欄に置かれているのと同じく「𪗇」の字であって、後に誤って伝えられて「𪗇」の字になったものではないだろうか。もしそうだとすれば、『悉曇藏』が引用する韻紐圖では③のFとGに支韻が用いられていたことになり、上で述べた假説を支持する一つの證據となるはずである。『悉曇藏』の韻紐圖で③Eに置かれている「𪗇」の字については説明が附かないが、これもやはり本来は別の字であった可能性が考えられると思う¹⁷⁾。

「はじめに」で述べたように、『悉曇藏』における韻紐圖の引用は『秘府論』によったのではなく、直接『四聲譜』によったと考えられており（本稿の注1を参照）、『悉曇藏』の韻紐圖が『秘府論』のものより本来に近い姿を伝えている可能性は考えられるはずである。

これまで見てきたように、韻紐圖における疊韻の条件はゆるく、例えば唐韻 *ɑŋ* と陽韻 *ɿɑŋ* のように、韻母の違いがほとんど介音の直・拗の違いだけであれば、全く疊韻の妨げにはならなかった。このことは、§1 で見たように、韻紐圖における雙聲の条件が厳密であり、聲母のみならず介音の直・拗まで一致することが要求されていたのとは對照的である。

3. 紐聲反と雙聲反

「はじめに」で引用したように、韻紐圖が掲げられた後には次のような記述が続いている。

凡四聲、豎讀爲紐、横讀爲韻。亦當行下四字配上四字、卽爲雙聲。若解此法、卽解反音法。反音法有二種、一紐聲反音、二雙聲反音、一切反音有此法也。

この記述では、韻紐圖に關連して反切の原理について言及している。それによると、反音（反切のこと）には紐聲反音（以下「紐聲反」と略す）と雙聲反音（以下「雙聲反」と略す）の二種類があると言う。この記述を詳しく取り上げている小西 1948：157-164 の解釋によれば、韻紐圖で同一の紐を構成している、上段の四字もしくは下段の四字の範囲内から二字を選んで組み合わせるのが「紐聲」であり、雙聲の関係にある上段の紐と下段の紐からそれぞれ一字ずつを選んで組み合わせるのが「雙聲」である。例えば資料 I に掲げた韻紐圖で、①

E「黎」と①H「振」、⑤A「良」と⑤B「兩」のように組み合わせれば「紐聲」であり、①A「郎」と①G「麗」、⑤A「良」と⑤F「邇」のように組み合わせれば「雙聲」である。そして紐聲反とは、「紐聲」の関係にある二字をそれぞれ反切歸字と反切上字に用いた反切のことを言うのであり、雙聲反とは、「雙聲」の関係にある二字をそれぞれ反切歸字と反切上字に用いた反切のことを言うのである。例えば、「振 黎結反」は紐聲反であり、「麗 郎計反」は雙聲反である。

さて、このような紐聲反と雙聲反の定義について、韻紐圖の構成を離れて、少し敷衍して述べれば、同一の紐に屬する漢字同士をそれぞれ歸字と上字とに用いた反切が紐聲反であり、それぞれ異なる紐に屬している漢字同士を歸字と上字とに用いた反切が雙聲反ということになる。従って全ての反切は紐聲反と雙聲反のいずれかに分類されることになるだろう。この紐聲反という形式の反切については、しばしば切韻系韻書の反切に用いられていることが指摘されている。李榮 1964: 100 の注①は“《切韻》系統韻書，相承四声字常常互为反切上字。”と述べて、幾つか具體例を挙げている。そのうち『廣韻』からは蒸韻の五つの反切（「陵 力膺切」「徵 陟陵切」「激 直陵切」「繩 食陵切」「升 識蒸切」）と職韻の一つの反切（「食 乘力切」）が引用されている¹⁸⁾。紐聲反のような形式の反切が好まれる傾向にあったとすれば、それはやはり、反切の口唱を滑らかにするための工夫の一つであったのではないかと思われる。歸字と上字が同一の紐に屬していた方が、口唱の際に歸字の發音を導き出しやすかったのだろうと想像される。

4. 陰聲韻・入聲韻・陽聲韻の關係

韻紐圖では下段の紐において、陰聲韻にも入聲韻を配している。陰聲韻に配されている入聲韻は、①、②、④のHが屑韻（先韻入聲）、③、⑤、⑥のHが質韻（眞韻入聲）であり、これらは中古音に基づいて、EFGの陰聲韻と介音が一致し、主母音が調和するように選ばれたものと考えられる¹⁹⁾。中古音推定音價を当てはめて考えれば、①、②、④の紐では齊韻eiと屑韻etが、⑤、⑥の紐では支韻iěと質韻iětが組み合わせられており、陰聲韻と入聲韻との間で韻母がよく調和している。入聲韻を選ぶ際、韻尾の子音の違いはあまり重要では

無かったと考えられる。陽聲韻に入聲韻を配する場合には、韻尾の子音の調音位置が互いに一致するように選ばなければならないが、陰聲韻に配する場合にはそういう制限が無い。資料Ⅱに掲げた九弄圖では、④の紐の AC と EFG に、韻紐圖の⑤と⑥の紐に用いられているのと同じ支韻の字が置かれているが、九弄圖がこれらの字に配しているのは職韻 $iək$ の字であり、韻紐圖が $-t$ 韻尾の入聲韻を配したのとは異なり、 $-k$ 韻尾の入聲韻が選ばれている。

さて、韻紐圖で上段の紐に用いられている韻と下段の紐に用いられている韻とを比較してみると、両者は介音（直・拗の違い）が一致するのみで、主母音は一致しない。（④の紐では介音の直・拗も一致しない。）また上段の入聲韻（ $-k$ 韻尾）と下段の入聲韻（ $-t$ 韻尾）との間で韻尾は一致しない。實は「調四聲譜」には、韻紐圖が掲げられた部分の前段に、韻紐圖とほぼ同様の構成を持つ次のような圖が掲げられている。圖の前後の記述とともに引用する。小西 1953：21 の [五] の條、もしくは興膳 1986：18 を参照。

或六字總歸一入。

皇晃璜 鑊 禾禍和

光廣珖 郭 戈果過

傍旁傍 薄 婆潑被

荒恍恍 霍 和火貨

上三字，下三字，紐屬中央一字，是故名爲總歸一入。

この圖の一部を、韻目や聲母の分類について注記を加えた上で資料Ⅲに掲げる²⁰⁾。資料Ⅲから分かるように、この圖も基本的な構成は韻紐圖と同じで、縦に聲母が等しい雙聲の漢字を並べ、横に韻母が等しい疊韻の漢字を並べて構成されている。そして韻紐圖と同じく、縦に並んだ七字は介音（この場合は合口の介音 $-u-$ もしくは $-w-$ の有無）も一致している。中古音推定音價を当てはめれば、唐韻合口は waj （鐸韻合口は wak ）、戈韻は ua である。この圖が韻紐圖と異なっているのは、A から G までを通じて（即ち陽聲韻、入聲韻、陰聲韻を通じて）全て主母音が a で一致していること、そして「上三字，下三字，紐屬中央一字」とあるように、陽聲韻（唐韻合口）の紐と陰聲韻（戈韻）の紐に同じ入聲韻（鐸韻合口）を配していること、以上の二点である。従ってこの圖（資料Ⅲ）では、陽聲韻の紐と陰聲韻の紐を通じて、聲母、介音（合口介音の有無）、

主母音までが一致し、入聲においては更に韻尾までもが一致する（つまり同一の入聲字を用いている）ということになる。

韻紐圖では、聲母と介音（直・拗の違い）が一致することを条件に、陽聲韻の紐と陰聲韻の紐をそれぞれ同じ行の上段と下段とに縦に配していた。そのため①と②の紐では、聲母と介音の一致（この場合ともに直音の韻であること）を条件にして、上段に一等韻が、そして下段に四等專屬韻がそれぞれ配されている。一等韻と四等專屬韻とでは主母音の性質に違いがあったはずだが、韻紐圖の場合、同じ行に縦に並んだ二つの紐の間では、兩者の主母音が一致するか否かということは問題にならなかったのである。しかし下段の紐で陰聲韻に配する入聲韻を選ぶ時には、介音のみならず主母音の性質までがよく吟味された。このことは下段の紐の構成から明らかである。そして入聲韻には必ず相配する陽聲韻がある。韻紐圖で、もし上段の陽聲韻を、下段の入聲韻に相配する陽聲韻に置き換えたならば、資料Ⅲの圖と同様の構成が出来上がるだろう。例えば韻紐圖の①と②の行で、上段の唐韻の紐を先韻の紐に置き換えれば、資料Ⅲの圖と同様の構成となる。

このように、韻紐圖では陰聲韻に入聲韻を配する際にしか行わなかった主母音の性質に関する吟味を、更に陽聲韻の紐と陰聲韻の紐をそれぞれ上段と下段とに縦に組み合わせる際にまで及ぼして作成したのが、資料Ⅲの圖であったと考えられる。従って資料Ⅲの圖は、韻紐圖の構成をもとにして、それを更に一步洗練させて作成したものだと言えると思う。

おわりに

本稿が取り上げた韻紐圖（資料Ⅰ）と資料Ⅲの圖は、いずれも『秘府論』天卷「調四聲譜」の前半部分、即ち『四聲譜』なる書物からの引用と考えられる部分に収録されている。そして「はじめに」で述べたように、この『四聲譜』は沈約による著作だった可能性があると考えられている。しかしこの問題について中澤 1957: 34 は、韻紐圖と資料Ⅲの圖は異なる二つの學説を傳えており、韻紐圖は沈約の學説を傳えたものであったが、資料Ⅲの圖の方は沈約とほぼ同時代の人と考えられる劉滔の説を傳えたものであったろう²¹⁾と推測している。そして「調四聲譜」で『四聲譜』からの引用と考えられている部分は、實

は沈約より後代の人である隋の劉善經の著作『四聲指歸』からの引用であろうと結論している。

本稿の§4で論じたように、資料Ⅲの圖は韻紐圖の構成をもとにして、それに更に洗練を加えて作成したものだったのではないかと考えられる。二つの圖のうちのいずれかが沈約によるものだったとしても、もう一方の圖は、沈約とは少し學問的立場が異なる人によるものだった、という可能性は十分考えられる。そして沈約よりやや後の時代の人々が、沈約を含む過去の複数の學者によって作られた、幾つかの異なるタイプの圖を整理して著述にまとめていて、「調四聲譜」の前半部分はそのような著述から引用してきたものであった、という可能性も十分考えられると思う。中澤 1957 は「調四聲譜」の前半部分と劉善經著『四聲指歸』との関連を主張するが、必ずしも十分な證據は示されていない。果して韻紐圖や資料Ⅲの圖を収録する「調四聲譜」の前半部分は、いつの時代の誰の著作に由来するのか、またこれらの圖は（資料Ⅱに掲げた九弄圖も含めて）、『韻鏡』のような韻圖の成立とどのような関わりがあったのか、などの問題については今後更なる検討が必要であろうと思われる。²²⁾

注

- 1) 小西 1948 : 143 は安然の引用形式に注意して、『悉曇藏』における引用（「四聲譜云」）は直接『四聲譜』によってその原文を傳えたものであり、『秘府論』から引いたものではないと結論付けている。
- 2) 『梁書』卷十三沈約傳に「又撰四聲譜、以爲在昔詞人累千載而不寤、而獨得胸衿、窮其妙旨。自謂入神之作。」とある。
- 3) このことに関しては本稿の「おわりに」で再び觸れる。
- 4) これは小西 1948 における呼稱に従ったものである。小西 1948 : 158 はこの命名について、この圖が『悉曇藏』卷二「悉曇韻紐」にも收められていることに因んだものであると説明している。
- 5) 九弄圖は現在二種類が傳えられている。資料Ⅱに掲げたのはそのうちの一種類であり、正式には「九弄十紐圖」と言い、「唐院本」と呼ばれる。もう一種類は『大廣益會玉篇』末に載せる神珙序「四聲五音九弄反紐圖」であり、こちらは「神珙本」と呼ばれる。詳しくは小西 1948 : 195-196 を参照。神珙本の九弄圖も紐の構成の仕方は唐院本と同じだが、韻目や聲母の選擇が異なっている。唐院本に使われている紐には、『秘府論』の韻紐圖に使われている紐と、一致したり類似したりしているものがあるため、比較の便を考えて本稿では唐院本を引用した。
- 6) 九弄圖の操法について詳しくは小西 1948 : 206-215 を参照。
- 7) 以下、『廣韻』の韻目については、原則として平聲の韻目を擧げて、相配する上・

去・入聲の韻目をも兼攝させる。

- 8) 以下、本稿が引用する中古音推定音價は Karlgren 氏のものによる。高本漢 (B.Karlgren) 著、趙元任・羅常培・李方桂譯『中國音韻學研究』(北京：商務印書館・1995) を参照。なお、Karlgren 氏は、四等專屬韻の音價を介音 -i- を含む拗音の韻母であったと推定している。従って韻紐圖に用いられている齊韻と屑韻 (先韻入聲) の推定音價はそれぞれ *iei* 及び *iet* となる。しかし有坂 1937: 354-357 はこの Karlgren 氏の説に修正を加えて、四等專屬韻の音價は拗介音を含まない直音の韻母であったと推定した。現在日本の學會ではこの有坂氏の修正説の方が定説となっている。本稿が示す推定音價もこの修正説に従っている。
- 9) Karlgren 氏は、脂韻と之韻の推定音價をともに *i* と表記して、兩者をはっきり區別していない。この兩者の推定音價をはっきり區別する學説としては、例えば平山 1967: 146-147 が脂韻を *ii*、之韻を *iəi* と推定している例などがある。
- 10) 陸志韦 1963: 353-354 を参照。
- 11) 『廣韻』には支韻上聲開口曉母の小韻として、重紐三等の「𪛗」(興倚切・所屬するのはこの一字のみ) が登録されている。しかしこの小韻は切韻殘卷(「切三」)には存在しておらず、上田 1975 は後加小韻と見なしている。
- 12) 『廣韻』には質韻開口曉母の小韻として、重紐三等の「𪛗」(義乙切・所屬するのはこの一字のみ) と重紐四等の「𪛗」(許吉切) という二つの小韻が登録されている。このうち「𪛗」の小韻は切韻殘卷(「切三」)には存在しておらず、上田 1975 は後加小韻と見なしている。
- 13) 王力 1936: 32-37 を参照。平山 1967: 146-147 は唐韻を *an*、陽韻を *ian* と推定して、この二つの韻に同一の主母音を擬している。
- 14) 嚴密に言えば、南北朝時代の用韻では、止攝のうち支韻は更に脂・之韻から區別される。後述参照。
- 15) 王力 1936: 10-13、小川 1976: 100-101 を参照。
- 16) 「𪛗」の字は『廣韻』には収録されていない。ここでは、『正字通』に「𪛗, 同𪛗」とあるのによつて、「𪛗」の字の『廣韻』における反切を記す。
- 17) 詩文の用韻ということを離れて、直接に Karlgren 氏の中古音推定音價によつて下段の紐における疊韻について考えた場合、①、②、④の紐に用いられている齊韻の音價 *ei* と、③の紐に用いられている脂・之韻の音價 *i*、そして⑤、⑥の紐に用いられている支韻の音價 *iə* の間には、既に疊韻の關係を認めるのに十分な音聲的な類似が存在しているのだから、③の紐の脂・之韻を(本稿が考えるように)支韻に修正する必要は無い、と主張する意見もありうるだろう。例えば三根谷 1972: 62 に示されている、中古音の韻母の體系についての音韻論的解釋によれば、齊韻は *ei*、脂韻は *iei* (之韻は *iəi*)、支韻は *ie* であり、これらの韻の間にはかなりの親近性が認められている。しかしたとえこれらの韻の間には疊韻の關係を認める餘地があると考えたとしても、やはり③の紐には⑤と⑥の紐と同じく支韻をそろえるのが理想的であったはずだし、またそうすることは十分可能だったはずだと本稿では考えるのである。
- 18) 例えば『廣韻』で、宕攝に屬する韻について紐聲反の形式の反切を探すと、次のような反切を見出すことができる。

養韻：「敞 昌兩切」「兩 良獎切」

藥韻：「芍 張略切」「綽 昌約切」

唐韻：「幫 博旁切」「茫 莫郎切」

宕韻：「滂 莫浪切」

鐸韻：「泊 傍各切」「錯 倉各切」

- 19) 上古音では、陰聲韻と入聲韻は押韻や諧聲符でしばしば通用し合う。しかし韻紐圖が基づいているのは中古音であって、上古音ではない。もし陰聲韻に入聲韻を配するという處置が、上古音における関係に基づいているのだとしたら、-t 韻尾の入聲が配された下段の紐の平、上、去聲の欄には、上古音で *-d 韻尾を持った韻部に所屬する字が置かれていなければならないはずである。しかし事實はそのようになっておらず、例えば去聲の欄 (①から⑥の G) に置かれた字のうち、上古音で *-d 韻尾を持ったと考えられるのは「計」(脂部) だけであって、「麗」(佳部)、「異」(之部)、「罍」(佳部)、「智」(佳部) はいずれも上古音では *-g 韻尾を持っていたと考えられる。
- 20) 資料Ⅲの① C 「璜」の字は『廣韻』では① A 「皇」と同音(胡光切)であり、② C 「琇」の字は『廣韻』には収録されていない。資料Ⅲではこれら二字について、とりあえず圖の位置によって示されている音韻地位を有したものと見なし、改めていない。なお、資料Ⅲでは「傍旁傍 薄 婆潑絃」「荒恍恍 霍 和火貨」の二行については省略した。この二行はそれぞれ並母と曉母の字を用いて、前の二行と同じく唐韻合口の紐と戈韻の紐を構成しようとしたものらしいが、誤字が多く、構成が混亂している。「旁」「潑」「絃」「恍」「和」の五字は誤りであろう。
- 21) 『秘府論』西卷「文二十八種病」の「第三 蜂腰」の項に次のような記述がある。興膳 1986 : 599 より引用する。
- 劉滔又云、四聲之中、入聲最少、餘聲有兩、總歸一入。如征整政隻、遮者柘隻、是也。
- ここに引用されている清韻開口三等章母の紐と麻韻開口三等章母の紐は同じ入聲字「隻」を共有している。即ち陽聲韻の紐と陰聲韻の紐が同じ入聲字を共有している點で資料Ⅲの圖の構成と共通している。中澤 1957 はこの記述を根據として、資料Ⅲの圖は劉滔の學説を傳えたものであると主張する。劉滔については詳細不明であるが、一説によれば『梁書』卷四十九文學傳に見える劉昭の子の「劉綽」なる人物と同一人物であると言う。「劉綽」について『梁書』の記事には、「大同中、爲尙書祠部郎」とある。大同は梁の年號で 535 年から 546 年に當たる。興膳 1986 : 76 注 2、中澤 1957 : 35 を參照。
- 22) 小西 1948 : 166 は、『韻鏡』は韻紐圖や九弄圖など、在來の様々な音韻圖から紐を集めて作成されたものだろうと述べている。資料 I・II・III で次に掲げた位置に置かれている字は、『韻鏡』の該當する位置にも見出すことができる。
- 資料 I : ① ABCDEFG ② ACDGH ③ ABDFGH ④ CDH ⑤ ABCDEFGH
⑥ ABEGH
- 資料 II : ① ABCEFGH ② ACDEFH ③ ABDEF
④ ABCDEFGH (④ B は之韻上聲知母)
- 資料 III : ① BFG ② ABDEFG

參照文獻

- 有坂秀世 1937. 「カールグレン氏の拗音説を評す」, 『國語音韻史の研究 (増補新版)』: 327-357 頁。東京: 三省堂・1957。
- 平山久雄 1967. 「中古漢語の音韻」, 『中國文化叢書 I 言語』: 112-166 頁。東京: 大修館書店。
- 小西甚一 1948. 『文鏡秘府論考 研究篇上』。京都: 大八州出版社。
- 小西甚一 1953. 『文鏡秘府論考 攷文篇』。東京: 講談社。
- 興膳宏 1986. 『文鏡秘府論譯注 弘法大師空海全集 (第五卷)』。東京: 筑摩書房。
- 三根谷徹 1972. 『越南漢字音の研究』。東京: 東洋文庫。
- 中澤希男 1957. 「文鏡秘府論」, 『國語と國文學』 34 (通號 10): 29-37
- 小川環樹 1976. 「唐詩の押韻 ~ 韻書の拘束力」, 『中國語學研究』: 87-115 頁。東京: 創文社・1977。
- 上田正 1975. 『切韻諸本反切總覽』。京都大學中文研究室內均社。
- 高本汉 (B.Karlgren) 著, 赵元任・罗常培・李方桂合译 1995. 『中国音韵学研究』。北京: 商务印书馆。
- 李荣 1964. 「《广韵》的反切和今音」, 『音韵存稿』: 93-106 頁。北京: 商务印书馆・1982。
- 陆志韦 1963. 「古反切是怎样构造的」, 『中国语文』 1963 年第 5 期: 349-385 頁。
- 王力 1936. 「南北朝诗人用韵考」, 『王力文集 (第十八卷)』: 3-73 頁。济南: 山东教育出版社・1991。

(參考資料)

資料 I : 韻紐圖 (『秘府論』天卷「調四聲譜」所載) 小西 :1953:22、興膳 1986:21 より引用。

⑥	⑤	④	③	②	①	
張 (陽)	良 (陽)	鄉 (陽)	羊 (陽)	剛 (唐)	郎 (唐)	A
長 (養)	兩 (養)	嚮 (養)	養 (養)	嘑	朗 (蕩)	B
悵 (漾)	亮 (漾)	向 (漾)	恙 (漾)	鋼 (宕)	浪 (宕)	C
著 (藥)	略 (藥)	諳 (藥)	藥 (藥)	各 (鐸)	落 (鐸)	D
知	來	曉	以	見	來	
⑥	⑤	④	③	②	①	
知 (支)	離 (支)	奚 (齊)	夷 (脂)	笄 (齊)	黎 (齊)	E
仰	邇 (紙)	奚 (齊)	以 (止)	併	禮 (齊)	F
智 (寘)	冐 (寘)	啞	異 (志)	計 (霽)	麗 (霽)	G
窒 (質)	栗 (質)	纈 (屑)	逸 (質)	結 (屑)	振 (屑)	H
知	來	匣	以	見	來	

(注) 『悉曇藏』卷二に引用されている韻紐圖では次のような文字の異同がある。

- ①D : 洛 ③C : 漾 ③E : 頤 ③F : 脛 ③G : 易 ④F : 葵 ④G : 經
 ④H : 鞋 ⑤G : 儻 ⑥C : 脹